中学生の部　テーマ　近江八幡、わたしの夢、ぼくの夢

☆　最優秀賞　『毛利衛さんと僕の人生』～靴のマイスター～

近江兄弟社中学校　3年　田口　弘樹

僕は、今、人生の最初の分岐点にいる。もうすぐ高校受験を控えており、これから大学、就職、と繋がる道を選ぶ大切な時期にいる。

僕の夢は、世界で活躍するスポーツ選手の靴をつくる、マイスターになることだ。なぜなら、僕は三年間サッカーをしてきて、何足もサッカーシューズを履いてきた。その中でも、ここをもう少し工夫をした方が良いのではないか、他の素材を使ってみてはどうだろう、少し履き心地が悪い、などと、なかなか自分にとって納得のいく靴を見つけることができなかったからだ。自分でもなぜかわからないが、こだわりを感じ、いつの間にか、自分の靴をつくってみたいと思い始めた。自分のためだけではでなく、多くの人に自分がつくった靴を履いてもらい、納得してもらいたい、と思いが広がっていき、いつの間にかマイスターになりたいという思いを抱いていた。

この夏、偶然にもテレビをつけてみたら、アテネオリンピックの女子マラソンの金メダリストの野口みずき選手が一位でゴールテープを切った映像が流れていた。感動的なゴールの後に、野口選手が自分の靴を脱いで、大観衆の前でそれにそっとキスをした。本当に驚き、感動した。彼女は、走り終わった次の日のインタビューで、「私の努力よりも、この靴が金メダル獲得へと導いてくれたのだと思います。」と語った。「これだ」と僕は思った。この靴をつくったマイスターにとってこれほど嬉しい言葉はないだろう、と僕は胸を打たれた。僕もこんなことを言ってもらえる靴をつくれるマイスターになるために、もっと夢に向かって

努力したい、と強く思った。

この夏休み読んだ宇宙飛行士の毛利衛さんの本にも、子供の頃、同じ様な経験が書いてあった。月の上で飛び跳ねる人を映し出した「テレビの映像」は、毛利さんにも衝撃を与え、宇宙への憧れを抱かせた。その映像とは、三十五年前に、アポロ一一号が月面に着陸したものである。毛利さんが過ごした青春時代で最も彼の心を突き動かしたこの映像が、一生を決めるほど重要なものとなって、宇宙飛行士に彼を導いたのだと思う。「テレビの映像」で刺激された者同士として、毛利さんのように頑張れば、夢を掴むことができるかもしれない、と少し期待感を持った。夢の実現のためには相当の努力や犠牲が必要になるに違いない。努力や犠牲というと、マイナス面が多いように思われるが、僕は毛利さんの人生からそうではないことを学んだ。

毛利さんにも、宇宙飛行士になるために越えなければならない数々の山があった。大学の助教授の地位や、大好きなスキーなどを捨てたり、宇宙飛行士に必要な基礎体力を作るために、水泳やテニスのハードな練習をしたり。他にも宇宙飛行士同士に欠かすことのできないコミュニケーションをとるために英語を学びにオーストラリアへ留学したり、英会話教室に通ったり、と、努力を重ねてきたそうだ。

でも、毛利さんのその時々の挑戦には、悲壮感も感じられず、ただ夢の実現へつながるものと信じる積極的な姿勢が強く感じられた。この姿勢が夢を実現できる人とできない人の違いではないだろうか。苦しいことを苦しいことと思わない、強い気持ち。夢のためなら多少のことを犠牲にすることにこだわらない思い切りのよさ、また、周囲の理解と応援も忘れてはならない。挑戦する人の強い意思がわかっているから、周囲の人々も協力してくれるのだと思う。毛利さんの努力には、苦しさを乗り越えた夢への喜びの方が感じられる。

僕はこの夏、将来のことを真剣に考えている時に、幸運なことに毛利さんの本

に出会い、オリンピックの感動的な出来事にも出会った。これからの人生を歩むにあたって、僕も様々な試練に出会うと思う。自分の意思の強さ、忍耐の強さにはまだまだ自信はないけれど、困難にぶつかった時には、この本とオリンピックのこと、そして困難は夢へつながっていることを思い出したい。夢に一歩でも近づけることを、心の底から願っている。

その夢の実現は、僕が通う近江兄弟社中学校、近江八幡市にも大いに関連する。近江八幡市は昔から靴の産業が盛んな地域である。学校のすぐ近く“あきんどの里”には靴のオーダーメイドを扱う店も最近できた。僕の夢が間近にある。僕は今まで一度だけ、ぴったりと足にあう靴に出会った。僕も近い将来人に喜んでもらえるような、思いっきり活動ができるような靴づくりに励み、近江八幡の伝統産業後継者として市の発展に貢献したい。